陸奥日記

慶應義塾

九曜文庫

○百里様のまゝ豊や浮と海色
海に寝る所り葉りまゝ何りく
かの母様を若の法きこらんとは此姿
をやいふ事し

四六韻

○東様も様の響古や長の夜 二日朝
様と云へは鍋と絵(体カ)し地様馬
法をくらの鍋(ヒナ)の花(生カ)の花のそうして民古

状はこうかゝくも坊りあく
商人の月を有かゝ居るこ
そふしく事して秋の湖しき
暦るはりしぬと一ノの海る比
井ニノの出合の隣し所ら
浪人の事はりれても角り何る
義やかしまる本しも鏡 鞘
何るも殆ま温築の絵を云
響も来くまく新の洞庭は
事は神も振くの色なる志こうと

上郡に郡の硯霧たるのあまを搭一つ
りちあり首迎の所を調ふ 縁
見送るや家も上郡にむこうら
別るゝや徒はかさせ花の夜
樹まして作きたる別まかな
永きりや猿蓑たしめは脇 花
而二三ハ作り笠も雲かな
十口冬ハ硯霧ハ口うつしまるを書
△ 今ハ使あるむのて海ツ一せ雀かな

十口冬ハ硯霧雅人の教をしけ所書下

△ ゆりの行来あるけき 旅衣 別保
△ 歳を口さゝ此立屋しけらん 定利
おきかけ遣りなりんも知らぬ夏を
うさふて
△ 人らさし出くも冬さら柳かな 二日
△ 何ゆゑ我まゝ見る海ゆや和洗ひら 巳清
道のたしめ見ハ何りくこと天ならんを見
とく 四日二市に泊る
○ 二十四日夏ハきのゝなかとまり 留田とてあれ

のあたゝく雲雀とて蛙なけり也
鶯く囀音をもしらぬく
△ 蛤や雛の鶯ゝ田舎ハわびし
春なれハ月もこゝけは実の気色
ころかを出すず古の若入りく
梅に擬ふなる袖をかさつゝて
△ 春とも海に堀出しの古の大雁の二日
△ 二月ハたちふ梅の串 掃婆士
同行も婚く接ぎの身を偶つでらす
の縁のりをかふ実く

△ 若草も古気の牙乱 巴流
△ 春も梅とて町の牛 勝 春士
夕北雲ちぎるなかりく日の入る
比の鶴の影なかりてれはちぎりて
りぬばかりしてやふ
△ 笑ハやし日和かまきぬものゝ 春士
△ 並にて輝や蝶乃翁の上 二日
○ 二十五日晴 宗と七里の濱とまつの圖を
見て鶯若草あふ鑑ふ
我果ちかり 満ちしてかた出より

なつかしく十万億土のかなたよりきたらう
たゞちに御安住なくてき候の御安心と相難き
芭蕉翁の石碑 呼続と称へ
○ 星崎の闇を見よやなく千鳥 翁
△ 花に中々鳴の声さや千鳥塚 二日
鳴海宿を通り出て星崎 呼続の浜は名所
・星崎を目当の雲も鷗の和 二日
・引しほに星の目利や走りかな 三清
三河の国に入りて 八橋の古跡を訪ひけるや
田中ありて かきつばたはなしと相しけり
たうらもきを

・むらさきは消えたるらしき菫の和 二日
・苗代や八橋かけて時ずれ 三清
八橋村の観音堂に碑あり 池鯉鮒の駅
次宿本寺に海馬神社の宮ー此石打て
牛若丸に切腹切りひし東の世に帰り
冷泉の石碑しかり
池鯉鮒の橋 二百八間
・流されて池鯉鮒の橋を二文字 三清
・春の日やかうハう風抜橋のうへ 二日
三河と云ふ事 矢作川 大矢作川 豊川

ふりくる也　　国倚よ弱ふ泊る

○二十七日晴　山中の里法蔵寺と云て我
東照宮十四の御菓と物ひ給ふ也
・ゴのむ我机の上の清氣ちらし　二日
みしき関家を作るを鳴くと俊恵のよめる
二村山もしけれり此事なり
國府の里　米林を人ハ古き国ゝ行くゝ杖なし
ゆくむおのしきまりて家も緑の林しくは
云ゝて便りとハなれり也
・牡丹餅よりれひ出く懐や宣下り　二日

・耕ふ春も出り移る地り邦　三清
大寶ひ和明寺ふ様ふ秋和ふ山の風景ハ田原の
里土口田城伊良古倫ヲ入南人
芸蕉の陽君ゝ様
○かけらの家を有ふ川鉄ゆ　ハ様
・かけらや記の名も鉢くらと　二日
接待うきものハたりしと知るなら
案所目ふ所ゆ事なりしの之
△演藝の角宮ハたりし政使婦ゆ　米様下　才二
△本貨ゆ事ゆ事　二日

御馬ノ湊流迎氏鶴翁とかや
ワナノ笑その婦人ちゆ笑とく
花聲多春
なもも八方ふ迎さ取すちや八千代と　二日
鶴伴仙齡
霧ふこそ離の名もなれ此の君　二日
世上六顔
新色をして降る取れ御代　二日坊
昼の鶴の新も取婦し　廿二
春秋付ふ来る常も谷古ふ云く　三渡

頃代くまはり月やも迎ひ　坊
所ふ出を知しなれハたくらや　二
鶴の藤の坊屋の三隅ちつまの取　渡
清須拓ハ略氣此翁を寸庵ケ　坊
臍くり春出ちのたし　二
篠楊も依仕之の掛まつり　渡
三上も名二ま従ゆ初と仰ち　坊
なし小碎ふ前をとや雀の誉ひ碎　二
如きしき海も海さく日の御　渡
出雄さへ裸くて拓紙ハ見苦しい　坊
借家かつくも又鳥之神　二

冠のうへかと船は燕う邦　長治
見しまた邦の枝も五葉　二日
海棠や二尺は嘴の眠くとも　楚覺
鵬已すゝて行の　む　二日

○二十九日晴　舟にて送らる
陽たゝに降る雨の別まうれ　二日
蕃坂河付寄かく
日のもひ寫に着ひ机う邦　二日
春
遠江に来く點くと邦様　拜信　河付

演私の蕃寺書連師を語ふ虚無僧の
布幸之洲俗に出のふてそ布を立て去
山寺の讀論を字や萬里の内　三清
井筒のほとりの書郷のいとなつりき
風情ふんを法ならまつく
よりの物は萬るに詩して柳が　二日
萬里をかしらくゆく長　風二
折始し所何を見て暫者の縁
土峯りんく川隠れつたしうなりき天龍川ハ
矢を射しりしりん所の頭る泊れ
三月初日晴　目坂の別布を笠根の宇と

浴に云なりうせて時なしかけとさはる
東啼の石ハ来往の石をさ海くく
・石も音ハ心の笛ひに海されけり　二日
佐東の中心こそかゝる鶴ほうしるおもしいとも
人ゆゑ知りけりの前見居て春の夕の
鶴ゆゑしとおりひきや
・見網の見たしるやこの山掛　二日
十河海り三ツ四ツ計りなる見の八挺の
鉦鼓頭にかけてうちめられたやいそ
がしき皆ほう立破き大鶴をおくして
おもしろふたやしこそる鶴文りおりひを

おしたりくく長そ悟る菊河の里ハ
藤久の合鶴に立親河の陸宣成出さる
咎とて武所に殊せしまてに除く
・菊河や源の鶴ハ春なりうら　二日
大井川のほしきこゝ風くもかしき海る
をはるにまつや源まるうと膽を消さ
とせひ二神も同をふさいて川越の
首に折まさきのるおそきまる程にも
ゆらせ向ふの岸に作りる
・人ゆくて知るまゝ　ハやおそろ川奔川　二日
・浮ゆる家も童や肩　東　三居

海りの山の法く汐干なる　三法
天人の姿ハ日人の間か三陸の本之
汐汲まの摘ハつまなき行干也　二日
清水等聖百姓の宮基之清水宮清水実
も日人海る程と云ふ
海法らも陸の法も人宮　三法
沖津川海ニ近く親知らせとなふ和ハ目
くるかく海とそる人のさし奴ま屋くも
なりしを
蓬陸山と名法くるる地盤高の此海より

なりしせなふとかや本尾を山辺に赤人乃
姚屋の地と云傳ふ古屋ハ此所より目の
川恨ハ却ふ古地なる人こも時ら法して
詠絶ハ抜きり蒲原をたなれて屏風
折り海ハしるやうなる坂一ツ越ハ
初る富士ま竜を奉る絶頂より雪
なるのく法ハ髪ヲ云ふ似たり
吉原の所ハ三日頃日新之所へ
云屋きふあらしきと
二のひも富士ハもてなき様也　二日

○世日晴吉原乃宿ふ曙の毎世代孫んと
園やより起て陳子引あけハ雪の流るゝ
下風の冬よりも寒しやてきゝ浚り如
白雲こゝ水く山の中腹通ふ手の座
やうな道とも是より登る事れ里斗り
となん石の辺の所田ふ何きゞかに編る
事しのいらんとも知りかたし浮島
う原雲よし黄船川を堺ひく
伊豆の国ふなり此る所ニ樋ハ
三丈ちかり前代流る隣西へ所を通ハ

せる水俗りとせるものゝ三橋所神ハ大山祇命
をみふる二市の原とさふ町ありそこふ風人
をる絶又

・冬ふ来て別るし世日の雛我　二日
酒おして酒嘲ふとも知らせ責む

・陽春やゆ道の御ふり遠ひ　半香

・啼ものゝ所ふ云目く捷ら邪　恭我

相模の雲は相根ふさしかゝりしるふ息ヶ
雲起て日の傍ふ蓋りとおりて道風前
く松松樹代こゝむ山神の岩先りや

小椒りく上もなき帷しさシえ哉
名ホや百まえ邦のちらホ梅　二ヵ
世の中利根ホ宿る
二日晴ハ小坂ツ下れ半雪昼浮ホ行り
三丁もかり花ハ入ん
手織ホ陽炎て治る古き寺ら古　二ヵ
小田原の駅行ら景町妻面女子小出め道
風雅のんツ繰としく浄を葉とむ治人
なり道　八
若葉のむやそ夜影のせの中も　二ヵ
夜かな宮ホ月の名ら懐ホ

竹のうら月夜の風雨も荒猛く
あけさいらは枕銘母もよもし之
雅もハ用ま捨て吾月の春
夏すみの八宮まや古
五月見ひ人と西風ホ竹の古寺
芦の葉も並人出ら棕字
捨てありけ古蔓ホハそら道く
新形ホ川て来ては古　寺
東め雲り御清宿迎もさえ保らん
二もて小も榾ほかけく観凝
氣や角とある月の秋も法縁え
三ヵ

百本平りの人ぬから笠
鍛時と蕃にも稱れ乾法師
茅庵飛ても示屋てゝ如此
鳴くり起信の嘘の起ら薦
かふ何ろふうと宇山の嶽
鍋の月熟稀も一ツ照り
風りそふ茅庵の御をも
何處ぬ白い小大場も出ぬ道
沓新時も言のいくはら
なの面附こめらるをありしさ
まは法くし上の宴敬

探題

茅葉や精進物ふ呼び出され　二月
陽光のもへくり清や新の上　三淺
摘葉の女子も海いる姫嫁が
殉伯りけて大鳥も人を落汐を
永よせて御ハ潜くり山さ外長
葉外のるんゆりも行り春の面

芋鬘逸生小投走
疵しきや而も知まてなの雲　二月
なの雪や月の如りも十月はと　夏田

地のうんかいさむもたゝ雪

濱藤の名も李列に清　蕨

巣ごつるの笠もうけ苗代

春風に泊るはたゝや両白川

接切ておる夜の獵

贈

濱藤の手に菓ゆや小田の取るゝ和

冬口

定まらぬ春も桂の元をさう和

拉抄

塩ゝに田も畔もなし茅屋梅

二日

荒るまゝ此垣の春風

連屋く

山陰やむの乾いも暖かぶ

たゝ腹うと云ふ生の宿

薫色大明神奉納　奈那　金毘羅拉親之

山吹や和も境の清　山体

清手洗に見ん学拍の撰ける

○六日晴　麦由主人机逸て詩して秋ハ必の

詩来も定めなきせなりう五のみとすれば

勤る

行ーノも麦の一字に名詩ば

二日

一る入川と息子代にて遊ける略立候に
花鳥井雅章公の御自筆の所寄物
○昧しきは秋なりとも知るまでり
略立候の昔なりけるく
秋萱唐ふ文人詩あの云の事をとらむ
、略立くに詩も濁さぬ沙干代 三清
、なお曇りさへ昧しいふ秋は 唯 二日
唐士ヶ原代木アミとして東西ひろく
牧笛嫋ことして南北なりし 夜候事は
一遍上人建治元年小基(元)しのふ夜候に

泊れ
○七日晴江ノ嶋人詣んと左りの事、別れ道
三里をかりて沙ノ干する時は歩り浪れ墨
の遠屋又奇ことを云ふ屋しありいはする
町作りしく実おこし橋もしつ者もしこ
山の程ひせよと詣ぬる人をとらむ而て
ま目前ぬ見事と賞る頭役袋の
苦しことなりすれとありふ事なく
至ぬ下ノ笑上の笑とて其ふ辭大天此
御姿は宗祇の恋思上人ののかなしこ

伴人のいふ碑の名ハ立むしろにてみなもとの全て
六十千貫ニ香母の出現しける所にて
蓬莱洞と穴とハ御社の別当の前にて
まりて浪の打入まりける所にて浪に
飛び船つく瀬戸なり此所ハ千丈の
隆巌千年の松樹ニ在所ハ蒼海の
の立ち江ノ島まで橋の経より出り

出つるや松がすその雲居　二日

琵琶の音ながれよせ千鳥　三夜

蒲原の左ハ鵜飼の里にいたる辞世の所

中比ハ月の下にも見えし伝説ありとも
名のミふしぎ乱ハかくて七里ヶ浜は
六十代ゑ里ある清き浪漫遠かりける
人浪に迎えし神にかやなき跡なる
かうし神の前に蒲原の昨と見

男浪に寄るやむかし此神の浦　二日

札朝征東大将軍になり蒲原にいりて
方八丁の廓殿の社をまつり橋をかけ
義貞ニ至る時の戦場にかやおかしの類を挽
出陣乃切通しに至り村の橋辞世なり

千服茶向釣寿命の切通し　星月夜の
　　鶯のなきやうきまで星月夜　二日
　　鳥のなき小降るな星月夜　三度
五月社ハ桂之帝　京政ヲ終ハリ長谷寺ニ二丈
六二人の勅ニ宣ハ御ハ深ク大仙ハ御長之更
五二人桂之帝ニ此事儀ニ遷長四年
八月十七日　色ヲ濃ク應安二年四月六日大風
ニ大佛殿破壊ハ礎のミ面ニ御
うたれぬひ焉ニ僅ニ稱さ遣ひてさく
給緣の役となさしめん方役こそ何ゆゑ

西鶴園の八幡宮の御前ニ西鶴石乘石新
向石ト云ふ三ツ有康年六年八月源利義
石清水神ヲ　ゆゑんやしに永保元年
義家修覆ヲかふ云り
　　雲ニ入る鳥井の新や西鶴の園　二日
建長寺此名のミ普く世ニ遊ミ樓門
かたむきくナロヲ悲ひ佛殿雪のこめ
ニ新色ヲ奉ける
　　春鳥ハむりしの絵や建長寺　二日
園ニ入る山安寺ニ建川武庫の石
垣ハ毛抜ヲ入させ大名ハ名のありけ

松江の鐘は十四京の鐘におとらず勝千里湖
の蓴ヲ玉椀に浮ふ野は月下に深し
踊の雅に春の鹿笠は かほらせ風雅の
脉しきは音に見てもすべき雪なるん
とかり故宮は明に明り此鳥の声ヲ恨む
へし憎むべし

○十一日晴 總日永寺 陳夢原 鏡ノ花ハ 舞ヲ
多は沈まる所之いさこと聞ケル 新鳥の
角田川ヲ渡りて 未母寺ハ梅柳ト額を
かの梅若丸の昔を思ひて

梅柳くなとかるべき柳也 二日

梅ヶ香り 乱てる此柳なる 三日
前如雪の衰ヲなるし柳しき 梅母

梅風殿の梅は 我が此しきるも実
雪の我ぬ新や 梅やしき 二日

飛井ニ比天神ハ 同帳まで 桃柳宮は分心思
ひとはりならべたり 羅漢寺ハ 黄檗宗也
五百羅漢おのく人の座するに 相もるに上に
持ちけりけてわさるかもなくなりは 芳の能なから
迫る四寸八面ニ 異の建立也

春 春のりや 五百羅漢ヲ 鉢ヲ 一ヶ也 二
天竺の雛ハ 三百羅漢ニ 三

松島の行迎度のん二日坊のこ
ゆいて愛白川の実代越んと
なりけ

・先年の秋風迎し老衰　暮を
中条に居れ東ハ田端屋小はの老宿来れ
○十六日晴華陽教人にいさなされて湯鳴
天飛不思地京色にし上野の御境内ハ
二玉門東廟山ト額行り山王ハ左高木中ら
彫地トかや情水鐘楼大御土口祥閣
法華堂上行堂陽明門の額ハ寛永年
二

本堂乃瑠璃殿ハ震翰ちく雲に入れ
・二王之碑ハ上野とむかし　二日
霊鷲山院ハ唱うく霊山院とまさしかふ
執當の職に御しくて特に為くおりけり
因ニ行うく書院に封敷を平家年始し
来しくてハと殊勝にかんくさせのふと掛置ハ
そこの白髪ハ知ら様とてかうしかりのふ
いくむの為もちかるりのみやんとこつから
庭地立ゆに清ふ行に添ふけ也や紅は
蜀江の錦にも西さりく白ハ信濃の雲に

鉄母庵し

一衣かへも音ハ居の牡丹哉　二日

是非一衆を遊ぶ度ことと伝へかし右の首
八隣国の様様（一通きよし代ひたる
ニ中らく近き隆代まて廷をに恥色て
浅野唯念寺東御堂日も経へ好れハ
幽微なるべく　国主及雲公の御庭
見るよし何遣は有給

蔦かたき時に立よりて

一捨てハ勝く捨ん気の麾　二渡

未到ること数終に可く　細川家の家屋
所則を見る

○十七日清けれ絶遊ぶ為ふしてやくの行ふ
かい云ふもの行ける家はかい見しきの
原中よりかりひ云ふる奥々日ハ出る
朱のりれ

一人ゝ小舟出ふく夜ふ文　二

一秋の夜路の春も文みの海の　巳

様の白綾包りまて云て終へ

一日ふ寐る字をハ寐し秋の雲　二渡

かし給て無く地にてしゝ山様　二日

世の中ハ六日の夜月に様ハ　[illegible]

千住ト云所之道ゝる今ト全ふして降りなハ
遊りんと口かしまくの之れ[illegible]の国に
須賀包ミか様く華陽公人に於る
草加の駅に泊ル本郷之ハ堂[illegible]の地に
行りてと雪ハ何とかくわうし屋元
こゝり

友達りめて屋ゝ世ゝ地ハ　二

西蓮ニ草加の宿ハ様屋ハ　巳

○十八日曇　雲橋のちよハ左右二里の行敷
[illegible]ハ[illegible]ト云ふ人ゝ[illegible]刀称川様
越ゝ

芸の名に列陽ゝる小舟ゝ　二日

下総の国中田の駅より又一里半の松乃
[illegible]之[illegible]日[illegible]下野の国小山
駅より高田道と碑ヲ立結城江連
に渡し[illegible]何[illegible]絹川と云ふ祐天上人
の陽度しめに田ふト云る女の[illegible]
久下田ヲ[illegible]道縦横ゝ迷ふ

御り言ッて上ニ高田の里に至る念佛
高田ト問さしれて知れ人たくなし法和場に
宿せる法よく雷ちしめき後ル

○廿日晴　如来堂六間六間　祖師堂十間十間　楼門
釈迦堂涅槃像　鐘楼　茶場　方丈　庫裏
柳ハ天竺白鷺池の枝にて菩提樹とともに
明星天子　虚空蔵菩薩　開山聖人に接ケ
奴都朋也五百年前より今にお續ス
御墓ハ三世ノも偏りく吉通之人と
十代の石塔代並ニ般舟ハ本堂乃

好り有ル此目ニさへきる亦祖師の原也後
ありひく南無何鉢伝くと唱ふ事ハ
白なんと作る為き家念を海し元を
宮村の清茶屋の旧跡ハのほりくたり
辛町ありし山のまゝ後ニ井のありしや
残る焼ケ井ト云ふ

○若葉にほうりと前ル頃ハ　二日
高田ハ如くたりし松の原ヲ打る也櫻
町の里より又原をりて吉里まはり
吉岡の里と如や晒木綿ヲ折とふ高く

撮なり又も原へ出て桑鳩の宿しと凡
三里之桑鳩より宮津宮と菫草なる所
木瓜のむのゝ咲乱きたるゆゑにて所の草
木ハ有し

・雛子明くや画に書く猫の屏風　二日

宮津宮ハ市中縦たる所にて家ハ屋と
せるものあるも石やち庭なしへと腰浅き人
斗も石ヲ以つゝ向けぬかしるに所がなき
け頭のゝに限る大和屋に宿れ得ぬ一

○廿一日晴宮津宮より猫浜徳次郎

大浜と四里の松の並木にて大浜よりハ
九市日光と四里とかり松の林二日光
の町ハ西蔵の御大名御普請の上下此
猫宿となり

○藤堂　勢州津　○堀田相撲守　下総佐倉

○松平出雲守　越中富山　○相馬彈正少弼　奥州中村

来鹽の橋家を移りくかし紅のまゝ家の
新土海しゆ二ゝるはりに孫女を拾り

・山吹や岸に久日乃ともうけり　二日

新吉院に至て佛殿に寝る

○十二日晴此院の向ふの山に猿行きて子の後り
連て猿ふヲ入る拠ふ音ハ川に傳ふまて
たかひ小女子ハ古けまして拠も桃も猿も
日ん寄しくる速い舌の音を手に聞らまて
時代同しうそ葉内の子ハ先る
立つくり
東照大権現の御宮に詣て拠棄き一
の結構なる事しかれ其ほ御同しく御人
そも見立なと望くい御しめてゆるさ○ハ
甲斐なし

・納まる様の事未来の風　二日

・陽光とみえても寄し日の光　三度
日光権現　女体権現　常陸勝道上人の
墓　籠の拠路　主外　奥の院に行かれて男
体権現の御結構の山ヲ黒髪と云あり

・雲霧くる黒髪の行ふ　三度
上松氏　異雲霧ヲ　弱ね　毎雪なるらさ
風すらふ　市中に御行りて風雅も叶ふ
ち地之

・あく音やんとさむ　茶の宿　二日
こまのふの冬市と云ふ　風りくたのうち奥列道

切別れ惜しく無有不生(フニウ)の里新なとりて
古ほ遠く危き極に立てる家に近ッ明さ
えて悪ひかくし

○二十三日小雨大雲関の篠原ッ立こる程の
万三里ちかり殺せられハ無実に行くりて
七里余論うり居たしうなしきと云
詠め居りて無りて大田原の駅へ
やゝ出川泊る所きは情軽の関れ
かて鉦撼の駅へ鐵力馬とまとふこと
る結ぶぬかと云ふ事之鉦撼の駅ハ

抽荒や雨と人の呼りにかりて中河は猪
鐵(コヒ)城に宿ッしこふ中河ハ殺せ石の家は藤
すてやしもすれハ公大何り宿の習ひとて
拝安何ましき抱へて安なき道ぬ所かなしく
訊ひ法きこう前に潮風のなくて指云
の雲花と鶴は奥藤の大名二十五公花
上にと云りけるも性し成の刻ちかりぬん
地震ス者へこる葉一碗ッ噛ける程と蕃

○二十四日雨芒ヶ拝て駅ッちなれて居の辺の
柳何り拝り柳とも云ふ細き家はなり

○二十六日雨さへふり続きて降れども猶
鍬の音し七ツ八ツ比しる時とたへせり妙
なるかなけてゐる比峠ふ入る猿の音し
をきく脇ふ汀唐ともて牛ゆかるる
のよふく聞しき苔南帝の歌ふ
宿れ初夜ばかりとおりふ浪うつ松ふ桜
乃唱ふ前り一ツ出きてあく

○親ハ鍬持ふ子ハ南無寄り揺も
うちしくふ

○着ふ眼さハ空ふはし地ふハ
さあの数しもしも

うちしく かなしき雨やまりり乃
あふきふ

四六韻

二ロ 薩縁ふ源の何や露れ揺
と 論も戸弁も管（カゴ）の停 学
二 行春成菩ず際ふおしまきく
こ おまり暗き代人ふこそ刻も
二 細やあやあう月叔もぶふくれ
と 砧ふ川の音も 一さてし
二 出代も代零ハ内り飛る鏡（合点）
と 行る思ふ寄り措翁ふかる

三里はかりにして鈴金堂行りて云あり
信夫の字指石あり碑の文に
陸奥國信夫郡毛知須利石始補其名
不知何時其說亦未詳也只恐万世之後
人不知其斯石故表而立碑於石傍云
丙子元祿九年夏六月中旬
福嶋太守鈴正虎表焉
六二人ちかりし此石之中ハ所に入ル石面はし
なるかやしきことなく又奇とする一とも此ハ
尽せし女様なる此ハ也然ハ
二日

月の輪の渡し此鈴へ葉折(コヲリ)の駅に出て
夜田の尹里ハ信拓なるかしくて立よれハ
ゑハ世に無しと行るに力弱りぬ
なき人をいて苦しき苦の歌
二日
判官の腰越雲ハ奇異の古来之こる二間
ちかり枝曲方ハ無き凡七八分とかゝ枝ハ
一ト だり人にも通なん おのゝ地にちらばふ
義経を云おし苦そ松のむ
二
おりしゆゑ雲に有候ゝ下り見
三
伊達の大木ニ二重塩の沼荷のむの種く

藤のまゝ乃ハかなし

大和ニハも伊達とて維子ハ[illegible]

貝田の里の所ゝりを下紐の実とそ越河(コスガウ)の

所に沿る伊勢ハ詣る人と行ゝて古曰ハの事

たるしむ

二百里ハ海ゝや源の岩(ハル)の夜　二日

神に俺しき海ゝ海ゝ夜ゝちなるに風像に

前て境子屏風こうちなかすハかりしと

ちまり居ゝるに水も明て涼しく定也

廿九日曇山中に甲冑嘗とてあり田村

の鹿(於)の邪妃を勧請しそうとかやなる方に

立ん女武者ハ作夜忠信次伝の妻女と云り

鞍破坂盤石石行遣ひくこ事ハ足ッかなき

にむつかし大河原に隙の関ハ名のゝ所ハ

槻木ゝ所より実行き人の東平王塚人

やんと云ふ立鄉ハ畦ヲ行ハ松曲平技

皆西ハさき郡ハ土ハ風情とやいふ事人

と云ふ事ハ郡ハ其ハ此ハの子古の風人

其の郷ハ名ハ此ハ[illegible]人ハ居ゝり[illegible]

ゝ見とせめしまゝ

風の事ハ雲鉤りして雲雀ハ　[illegible]

都ハ[illegible]風雅の[illegible]入[illegible]

感し奉りて往還の序く如此

一 近道て新のかける書の言　二日
岩佐の歌ニ宿をもとめてなと二人なとハ
むつかしけれハとく出たるをとふやしくと
いゆやき家に寄りく掃の宿ニ泊ぬ路ゆ
人さはかりく地さハかしく前をとりけれ
候ふもさあ掛え打さきて故の明をと
浴ちかるしふ脇と水かたしくて掃ある
老ばはなおのうめくめそかりけりと覚え
あらし

○毎日晴　又きのふの異ける人ふ行逢ふ
あるふ此歌ニりのふ老人ふ由之
ありけるありニ問ひまゐらせて
一 岩くまも出書記り之雑の言　翌
一 於日の出中 悠之の新法師　二日
岩佐の歌ニ上るまてたゝ小さしつ宿るよし
笠寺と号く 道祖神 又安置すの鎮守と
云ふ笠寺と云ふも續きく昔の石仏と
見ゆ由ハ今の此本を悔みてやかん
翌朝小吾 道まんにかゝると知るし 中田の

駅の入口に名和川有

一 行者や川に名を持たせ　二

一 書用や流に入れ名和川　巳

此所より仙台に城下に入らせ国分ちの前に如く塩竈の所ゆ宮城也乃来に遠くせに流らなる壷の石渕こゝ廿六丁人幅三丁人厚サ二人奈

多　去京一千五百里

賀　去鰕夷国界一百二十里

城　去常陸国界四百十二里

去下野国界二百七十四里

去靺鞨国界三ノ十里

此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勲四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部少卿兼按察使鎮守將軍藤原恵美朝臣朝僧修造也

天平宝字六年十二月一日

又ゝ年宝曆十三賀来之ノ十二年に行ふ事

塩竈明神ハ味耜高彦根父命にて婚く
塩池橋より石階二百余本社左宮右
宮相殿にして参詣群集絶ゆることなく世
ますやさて様ハ前のむかしと云

・塩竈や女にちぎりし夕煙　之房

・塩竈地名にあはれしき　採代

海上三里松ひかりの景色ハ天の塩竈
けかり日本第一の絶景とて雄島籬
島も入る島 籬島 馬柳子島 同参島
菅釣島 仏島 暮地島 裸島 仁王島

二百

蓑輪島 曽島 舟入島 内裡島 鮫釣島 伴
挑島 小町島 毘沙門島 布袋島 寺子島
蛇か島 弥子島 ろうそく島 二子島
其外名もしらぬ島々つらなる島を集めて
八百八島と云り 西ハ富士の山の絶頂
人ハ猶ハ国守の清さ見事の姿を望む
御いや二百里の名にして越て
甲州の御岳の雪降る景色なし
悔なさん

・黒島くもりはあかきあかつき

二百

雲鶴り泊れ花ならぬ歌之にり

○四月朔日小雨瑞岩寺の開山法心和尚ハ
宋乃無準禪師ニ入ルヘシ座禪ニ而得ル
事の年侮鈍しく相傳ニ居ス中興ハ
雲飛禪師ニ無相窟ニ聖徳太子ハ
像時頼入道の碑有本堂 唐佛の
鈔也音ニして莊嚴俗を離れ雲飛禪
師の本像 関山國師の画像 文王の
間鷹の間 葉の間 樣のうりゐるをとり
くまりかたしの酔ニ拙ふかと鑑ん

是莊の義ハ雲飛乃別室と云ふ
御傳と云ふ之葉師堂寧正の碑
是莊義の碑 是ハ家ニ堂時の美名ハ
彫入ル潮ハ海ニ至れ出て私ニ
乗ヲ行て海の中ヲ歩む泥の上ニ
是ハ寸なれり来ニ去ル
此ハ乗ニの是と云ふ出ハ我ハ
と云ふ小案ニ行ハ物語の人ハ
やしなる是と安ハかくて
や時ニ宗ニ家の詩ハ棒の
ニ見えたるとかや

家乱りハ頭めつくミつと微ミし番風と
しく白川の頭より二丁一里ト見し頭ハ
百文ニ満ツ第ハ文書ニ出ニ行程ト字立て
外ハ六字六字ニ加ゆる

○二日晴　書林の丈芝ニ對て

卯の花も雲や文ミニ晴らさむ　二

諸猶くさミれ眺めし様ニ衣　己

答

卯の花や奥ハ意きまかるの声　丈芝

白河の頭の中経たのくされ武隈の二本の
松ハ何れ有ゆ宗乃元善任国の時ニ鉄絵
の松とそ千ゑ者義任国の松しも伐て
橋ニさて能因法師の再ひこちのくニ行
御の時

武隈の松ハ此度跡もなし千とせを経てや
我ハ来ぬらん

とよ見りける之れも鉄の松ゆえみこてさし
の後人等ん事しく高くりんの結ふるなるべし
行の朋歩行ゆ行行環こて音画ス

一　くすり二本の基ニ植ゆ一

二百

塩の苔まや二本ハ其の梢より　巴清

女夷共ハ二本ニ續きて一つの鼎に似たるハ
大堰川も見りに聞きて肱の梓をさきて
ミな我物ヲ返ふかとん恨ひて右の家
の話り宿ス

○三日晴鵜河の関に到る事ハ申さきて
兼て行て下ハつきヲ打忘れて居りし
三関寺の中に心ゆりけるの侍の相言
り脚ならハ音ゆ発る仕事と云ふ也

やん附必ス其事なくしやと語しく
笠ヲ掛ケハ行り小蓑ハ笠ヲ背ひ
日の腕のあ音ヲ新に行て俗の
一つヲ言くとよそうけさう

○路賊も出てハ好るき武勇婦　二日
其儀に名のれ帰り物なりとふ
いふ人ありと巴清ヲ指さきて
おかしかりてゆるし我武勇婦ヲ出せり
二日坊とすべきの事の口惜し葉新の
話に泊ル

○廿日晴二本御の駅ニ安達太郎山ト額ヲ
かけたる寺ヲ行りむかしの安達ヶ原ハ此ヲ
の畑ニとそ
一 甘多菅やや北の角の角のかたちく 三居
温石所の駅ハ温石ヲ賣ル事ニ石や
一 温石ヲ見ふ人も有し甘多菅 二日
本ニ云ト云不伯ル
○二日一両陣香山ハ日和田の駅ニつゝく他ヲ
山や寺ニ老木の垂一本新ヲ栄ニ
一 甘多菅やや雲刈駅ハ陣香山 二日

一 森みつる清水ニ給ふ陣香山 三居
安積山とも云り白川ノ駅ニ泊ル又武川の風土
より来ル詞書なとす三ヶ日ハ暑ス
一 郡ニ小関もいらくやすとまん 鳥巻
一 津のくしミ栄の和さやすとまん 芳菅
○六日晴 能因法師の芳田原ニ給ふ和歌の
云の事ニ代かりひ出く
一 日暑ミもいさ白川の所ニ 二日
大田原の駅ニ泊ル
○七日夜 見ましきに道北の山の駅

小笠原川あり喜連川の絵ゆるして家乙女村
甲乙女坂とて
・夏の日や家乙女村も夏の笠　二日
夏行しくてるのかゝひさ止る初とのすゝ
いとこゝろ細き山中の夜のくらきに
・急所の辛さ〳〵附しかゝる　二日
武家の絵ふ泊ル
○八日晴　武家　白浜　宮津宮もまそ寸角て
新舟ゆり行風の姫くやうに夜ゆうれうり
花も行り菊ふはりも行り折ふ笠瓶も

行るそりいらぬる花そと里の夏ふ爲ぬれハ
佛生會之と云いらさ海佛の花ヲ立ふ如家
すきも爲りしき
・諸佛や夜とハ老ひんすも　二日
宇津文大明神ハ社領千七百本名宇津花
○九日晴宇津文下り西川田の里ゆく
二里の原之壬生の里より藤ゆ陰ヲたりふ
孫の日之出浅太ふ山ゆる柳本の里當ノ里
も過く宿ふ出の地獄爲ヲ拝すんと
廟を跡く苦ふす角り菊ふ[illegible]海へく

涼しき世や名所の宿の京都たち　二日

奈良野に泊ル

○十一日雨佐野に宿ッ無る石のうたちなかに
動くかの山橋は御前をさる石なりに御す
又定家の中興とすふもいりとかやこる縁の
跡に書ふ事ヲ得ハ大ハ十日にもなりけり
再會はよろこひ

見人遣ふる我郎の世の天意なる　二日

いるしの方うちに若き人の柱ア方海り明

かくて懐云ふ人代ルくさ来る打ちし此ハ
そまりしに于家は御つ横川の風景にふ
物語り行り　青井田の紙もるて此義ふ
たふこ也　那鄙一同小説ふ所の事語り
似て奇峰たくねなし

繻ふ為て動り頭ふ居るやの候　二日

恒和に泊ル山峯の里ト云ふ所は不なくんか

○十二日晴山路ふうる現き茅屋刷る石
なりと云かそうしかしこと云里にして
雁氷峰ト云ふ熱地桂現の社ありを相さ

・ぬかぼくも涼し確氷の飛のお　二日

日本武尊此海上の難に擂脇の代りく
身をさせのふせへ脇ッ忠く吾妻くと信
うりしはけ所之それよりして吾妻の絹
越まり碓より十八丁下りて新井沢の
駅之遠近（シチコチ）の里ゝよりあるハ見ゝかや信濃の
國ふなり故

・遠近の里りの古さし集東之　三夜

ひふも海ゟ嶽ハ千年化ニ異之姿ちの二之
せるれしき夕陽ふ物ゆてれたしり也

・雲の葉ふ續く櫻や淡ゟ色　三夜

・山里乃好きくゞ屋ん淡ゟ色　二日

燒石の赤きも黒きも地ゟ當ッ帯の駅ゟ居れ

○十四日晴淡ゟの櫻海ゟ日此ゟ屋ゟ居ふ
いよく畫之進ゟの駅より吾妻ゟ道く別れ
か笑の往遠ゟく淋しくも呼ゟ去古の里
燒ちまの名ゟかく道をしふ去古居を
云ふ所得行り

・人も知ま活いまハ繪る母婆姫　二日

籠ゟ一川の一日繰ゟ来れたしまて見る母婆

の駅ゆるく犀川何り川の廣サ云ヘテ是
も手繰ゆるく猿のうち連て拔を清さふ
面しふりみ雪清く菩提寺の駅り見く
見ッ姫ヶ事を小結く文母なとふ遊ぶるん此を

一 清佛ふいひて猿や本下圖 二
一 紫の雪の移るか 蓉人 三

戒檀内りとて清和雪の厨子の下ハかりふ
不の椽のトシ云ふ也ふる晴ふしく東西ヲ
已ゝ○ハ死出しかりひヲ夜ふ觀せとと之

一 螢よもかそりく晴ひんゝる 二ヵ

○十六日晴 卯刻系結ス 念佛の夜一山ふ雪く

清同脹そく清佛を自ひかもかゝを本
雪ハ八重乃ヲ根の奥ふかゝせのひく
出何すのかりし海すとハ命ゝそなりら
御代志日しハ年の刻もまゝ日し

猿尼寺

一 陰なきつゝしも悔し夏座賀 二
一 風流の内を内しきまゝすれ 三

葉ノ屋ヲ入ヲ有ルも恥し
一 うれ晴ヲ窓や蘋の草墨 猿尼
菩提寺ハ駅ヲ立て猶高山ヲ川中鳴と
云よし 葉原の里ふ阿ル

○十六日毎来原の里より晴れ出ゆく二年
すきかりたりしかなる所之歌を雲に十二京
ゆ係む
東科山 東科川 田毎月 雲井橋
冠着山 徒歌山 寶池 有明山
二重山 八幡ヶ岳 小袋石 姪石
姥石 十三京ヶ岳や
姥石 小帰ゆ 姥も行り 毎陸 二日
拾ひまさ 姥も出えさり 苔衣 三度
毎頃小作く 神小古々 北々衣ヲ催さ

猿ヶ番場ト云ふ所ニ少し見も切て小
いとしこ居二里
同を望む猿ヶ番場の宿是也 二日
乱橋の里ヲ離く三條行り 倫しさ事
前小倍さて毎ハ蓑ヲ見し 草鞋の盤石
より 重くおほ内是ハ 斎田の所小居ル
あり 是ハ是は 雇も 風じく
四ツ頼
卯の花の城や 鶴打 云のとき 二日
ちやう 三ヶ森ニ 好情ヲ 行ヶ草 三
小村を小さやく 与るのまいさ 二

行り兩吟之内連ハ
一 こゝろも松の下に営ゝな
一 早月に近き園ハ行燈すし
楮りすゝくこと哭らうしとも海さゝけ
捨し振わしも行くさハ古口の田りしきに
一日もいそう進しと佐略留は安ふて然へ
一 浮萍や底にからまる海苔かづら
楮稼か京ハ武田ちる尾の古銀備とかや
紀伊楮り放ス三周人も去ると為て
原に芽刈りし調行りさ夏こそなてさし
一 難長の乏鏡万鏡や行こる

正居

○元止の旅ふ泊ル
十八日晴 川をも萬石安部ゟ舟あ乃
御旅ふそうし 奴据作の格り婚とん説の是前
見かしき見る不知名乃尾も情ハ古木ヲ様之
く式ハ如く武ハ宿ス様中の一風俗なり
多く旅俳 卒丁とすも云楼見ゑし
八百原と室石の際の親比同ふ義作の如く
あり 将ふ心り世ひ前ふ何ヲ以めてさて
様相なき見ても 古百年の後ふ田畑の書ヲ
まさし半るヲ 新つ向しとハ云つきりき
一 営る法紀ぶハ老の皮

・地紙に春のとるやかんこる　正清

小社木の間にかんたり福嶋の駅り関家
行り女たりを告むけ駅に去井太郎公の湯
泊り之國者にて老幼の者運いさしく
ありしい屋り待る駅のたしに宿をはらく
ついしるに

○十九日大風雨福嶋にたゞまきくむし中間
乃棧の頃ありて今は切り石こゝはこゝ上り
中に長きことなしかの菩提の大木にから
む葛かはらと行りしに夜の中なり

・棧や膳も冷こる苔情あり　正清

・棧や蝙蝠の鳴く足のうち　二日

巖は雨にて湖ひて打に顔をもたらに
打り市嶽と額たりおくる鳥井行りく
社はなし上ヶ杉の所に傍きて臨川寺に京
行り庭よりの海へ怪岩奇石雨光の庭と
名高嶋は春生ひて麗しきことたち絶り通る
ありしを思ふ浦嶋の命り鶴氣石屏
風石干外雅なら名高ハ通ハ曇れて

・嬢(ゆかた)苔のかたを雨の庭の好きなり　正清

小和に鶴雨をくらひて前へ
・ゑこれ日高ハ鶴の氣に有し　正清

二日

三度

二日

並字始しのむつかしき様
字まちまちのハ先主の筆もかハかせく
小こちらハ名のみ多く時雨ぬり
東芝拙のこてまてハ月も出る時
金くるゝ様ハ信名氣もよ
祇園を稱ふ事ふちう郷
取くらべる異の張ハい
燭燈の持ふ灯て窓の風
事かふ待て遠かきさる
出きぶいの田て詠る梅のを
花ハも詠る若し離す
鶯の春ハ無かも如是面白ら

祇園のあるは閑てかりうり
柄鏡ハ主ハ而目うしあいく
呼く鞍ハ三味せん
たらりまてく筆ふ老ノ起きり
針の穴うら風のさむけき
絲掛としたれハ案ハ活る
鼻ひるみけて前ハ糟ハ近
田舎ふトかふ白るのかちやう白ら
みちロトハ訳申ふいと夜をハを
腰ふ知るこをを面ふ小書し
宮も大事の娘なりしこ御

○廿一日晴大井の宿と外折の宿の方に泊り
ニ人の娘とて来の元に西輪を立て奉れ
なりらるゝ同なりし

・卯の刻や雲の晴るゝ此石とハ　二日
十三條三里の所と奉りの若しきに
腹さり大久ゝ日の宿に御嶽の宿も三日
此日晴に似たる坂の数ヲ知らせ和尚に
祖の前と書たる碑ありて故ヲ問ふに
答る人なし

・姫の名や神原に一人ヲ百合の宿　二日
佐久の宿ヲ立て本宿の里に宿れ奉る

毎の御りとらしきて松坂の老人と同宿せ
○二十二日晴日れ如く国の松のきしらのきく
ちや毎に毎ハ名に知ふ十四ヶ日の大河と
太山の城なく関ヲすべて祖の中の人に
数に逆ふ所の前る所ハ毎も毎に射る
うしとく走り勢に陣ふ所ハ所ハ上の上に
拵ふうしし後阜山内城の里に縣に
笠松に老大に日入る也

・浮草や掉も憶しき下りて　三日
・毎じやとて掉せて垂れ
りしな　二日

甲の列に十八里のふと素ゑんに行ける間に
泊りヲ一ツ御法きと抱えふなとものこゝに
延すやうに行る古人のかりひ我なすと
書き言ゆに無事に出て白石の屋
事給ひ

一 なも嘆ぬや其頃の丈三間り　二日
いさ御堂ヲ祝ちんと老のこゝろをひこれ
拵しくく

一 不二の目乃瘴そう延て初かる　仙行
一 かりのかに不て乃御堂や宿の屋告　東和
一 東からなかりやまなこゝろと　[illegible]

四日市の駅に初起るまなんとありしに比に悪く
○二十三日晴海に明屋に泊ぬに立にき
方なといふとありしまかりわくるく日本の
里の庵を女の童にしこやけに買ふとて
一 一人り海へ風のおきに海の国有る　二日
進方の里より伊勢法の位と打連て別る
白子の里に前逆士ヲ行ぬるに道ハ左内
洗ふ御方の祝ひのんせんと磨手採ふく
名も面白き茂在鮮をとてみる
一 鮮雲にて本当の地の嘲れ　二日

又

○朱雀のさへ皇ふむの青海て　白子 文潤
伊勢乃海へ

、東風や湖水の帳し□の夢　上野 古冬

、こゝ秋や□□の連八つの瓜□行　硯露

、戸や□□□□□い錦の中　久居 桃渓

、□□のもの□□□□や□□池　ゞ 三有

勝□□の□の春風の郷に君二八之
年□□□□連り□□□□□□の湖
□□□□□の□八□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□之

□□□□て□□の□連□の□□□の
収ひを□□□□□□□□□る

、茂□□も折□□代の□□□　武門 吉甫

、□□の□□□□□□月白　一和

、海□□□□□□□□□□□　季架

、織くる□□枝□□□□□□行　石律

、肥く□□月□□□□□□の月　淀芳

、□□□又□□吉□の□種□　千甫

二□□の□□□□□□□□く
□□□□□□□によく□□□
□□□□□